東方双子録

セメダイン広住

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

運命と言うのはやはり引き合うのだろうか？
どんなに引き剥がそうとしても自ずと引き付き合う
もしそれが血の繋がった家族であればなおさら・・・

注意
だらだらと更新していきます
いかんせん文才が無いので変な文章になると思いますがよろしくお願いします。

目次

一話　いつもの日常 ―― 1
二話（前編）　蔵の中 ―― 3
二話（後編）　蔵の中 ―― 7
三話　博麗の過去 ―― 13

一話　いつもの日常

「霊夢と魔理沙って姉妹みたいね」

そう呟いたのは私の友人　アリス・マーガトロイド
その言葉に対し、
「はぁ？」と苛立ち言葉を発する目の前の巫女は
私の古くからの親友（ライバル）博麗霊夢
「こんな奴と姉妹なんか絶対やだぜ！」そう発言するのは私　普通の魔法使い霧雨魔理沙
「いや、良く似てるなぁと思ってね」
「なんでこんな泥棒魔法使いと姉妹じゃなくちゃならないのよ！」
「私だってこんな貧乏巫女と姉妹なんてまっぴらごめんだぜ！」
「だれが貧乏巫女ですって！」
「あれぇ～？もっと分かりやすく言えば良かったですかねぇ～？レ・イ・ム　さん」
「っ！　あんた！表出なさい！」
「上等だぜ！」
「ちょ、ちょっと！
私が悪かったから少し落ち着きなさいよ」
事の発端は私と霊夢が些細なことで口喧嘩をしていただけに過ぎないのだが、アリスの一言で喧嘩に拍車がかかった
「ったく…　なんで急に姉妹だなんて言い出すのぜ？」
よく周りからは「仲がいいね」とか「親友」とか言われるが「姉妹みたい」なんて初めて言われた
「いや、別に深い意味はないんだけど　ただなんとなくそんな気がしただけよ」
「全く…　縁起でもない事言わないでちょうだい」
「だから悪かったってば」
「そうだぜ　私はもっと女の子らしくて人望溢れる乙女だぜ。こんな奴とは大違いだ」

「あぁ？」
「あーもう！喧嘩しない！
・・・　はぁ　私はそろそろ御暇するわ」
アリスはまた喧嘩を始める私たちに嫌気がさしたのかそそくさと帰る準備をする
「なんだアリス、もう帰るのか？」
「あんたらが喧嘩するからよ！」
私の下らないボケにもちゃんと突っ込んでくれる、流石アリスだ
「一緒にそこの白黒も帰ってくれないかしら？」
「あ？」
「はぁ・・・　二人とも仲良くね」
アリスはそう言って帰ってしまった

少し間をおいて霊夢が言った
「・・・　あなたは帰らないのかしら？」
気がつくと霊夢はいつもの口調に戻っていた
「そうだな、またパチュリーの所に本でも借(盗)りにでも行くか」
「あっそ、せいぜい頑張ってらっしゃい」
「何だよつれないなぁ～　もっと寂しがれよ～」
「どうせまた明日来るんでしょ？」
「ははは・・・　そうだな」
そうだ私はいつも喧嘩した翌日にはケロッとして霊夢の所に行く
そして、霊夢も何事も無かったようにお茶を出す
これはもう恒例行事になっていた
喧嘩するほど仲良い　とは良く言ったものだ
「じゃあ、行ってくるぜ！」
そう言って私が箒に股がると霊夢が
「いってらっしゃい」
と少し微笑みながら言った

二話（前編）　蔵の中

「Ｚｚｚ…」

「ｚｚ…」

「ｚ…」

――――――ＡＭ６：００――――――

「ジリリリリリリリリリリリリリリ!!!!!」

朝６時　河童に作らせた目覚まし時計のアラームのけたましい音が部屋中に響き渡る

「うるせぇ!」

そう言って私は壊れる勢いで目覚ましを叩いた

「はぁ…　全く必ず起きれる様な目覚ましを作ってくれとは言ったがこれは…」

目覚まし時計の側に置いてあるコップには音の振動のせいか少しだが　ひび　が入っている

「…　にとりに言って改善してもらうか…」

にとり　とは妖怪の山に住む河童だ

とある異変の後から仲良くなり今では彼女の発明の手助けをしている

「全く最悪の目覚めだぜ」

「…　昨日のパチュリーの呪いか?」

昨日　あの後霊夢と別れた私は早速「紅魔館」に行った

いつもなら一冊しか借りれ(盗め)ないのだが昨日は運良く二冊も借りれた

そして、去り際にパチュリーが

「呪ってやるぅー」

とか言ってたが気にせず私は紅魔館を後にしたのだった

そして今

「うーんはてさてどうしたものか・・・」
流石に昨日の今日でまた本を借りに行くと本当に
パチュリーに嫌われてしまいそうだ
何だかんだ言ってパチュリーは私に魔道書の解らないところを教えてくれたりするいい奴だ
「よし！」
「やっぱり博麗神社に行くか」
考えてみれば私はほぼ毎日　博麗神社に行っている
これといって深い訳もない。
ただ何となく行きたくなる
「まぁ、昨日霊夢にまた明日来い的なこと言われたしな」
そして私は着替えて簡単な朝食を済ませると箒に股がり早速博麗神社に向かった

――――――――博麗神社――――――――

「おーっす霊夢！遊びに来たぜ！」
そう言いながら私は神社の境内に着地する
「よいしょっと」
「あれ？」
いつもならここでお茶を飲んでいるか境内の掃き掃除をしている霊夢が「あら魔理沙おはよう」とか言ってくるのだが今日は反応がない
「おーい霊夢ーいないのかー？」
神社の境内に私の声が響く
「・・・」
「まだ寝てるのか？」

私がそう呟きながらいつも霊夢が座ってる茶の間に目を写す
するとそこには一枚の紙が置いてあった
「ん？何だこれ置き手紙か？」
その紙には「魔理沙へ」と始まり霊夢は今日一日人里の結婚式にお呼ばれしていて夕方まで帰れないとの致が書いてあった
「何だよ、んな事昨日のうちに言ってくれればいいのに」
恐らくただ単にいい忘れたとかそんなところだろう
もしくは私が帰った後に人里の人間に言われたかのどちらかだ
霊夢は妖怪退治を本業としているので人里の人間達からは何気にありがたられている
そのためか結婚式などのイベントに招待されるのは結構あった
「んー・・・ しっかしどうすっかなぁ～」
家に戻り魔法の研究をしても良いが最近新しい魔法の開発に失敗したので少し間を置きたかった
「うーん・・・」

「んー・・・」
私はこの後どうしようか神社の周りを歩きながら考えた

「アリスの所か？いやアリスは今日人里で人形劇をやるんだっけ」
アリスは人里の子供達のためによく里で人形劇を披露している

「香霖堂・・・ でもなぁ～この前行ったばっかりだし」

「ん？・・・ これは確か」
神社の裏に周るとそこには小さめの蔵があった
「確かこれって宴会用の酒とか入れてるんだっけ？」
宴会の用意をするときに、霊夢はいつもこの蔵から酒などを持ち出していた
「そういえば私この蔵に入ったことないな・・」
「・・・ 気になるな」

単なる好奇心だ
運良く酒でもあれば飲もうとその時は思っていた
「よし！　善は急げ　だぜ！早速お邪魔するぜぇ～」
そう自分に言い聞かせながら私は妙に重たい扉に手を掛けた

二話（後編） 蔵の中

ギィィィィィ・・・

扉は少し錆び付いていて開けにくかった

「ふぅ・・・ 何とか開けられたぜ」

それにしても埃っぽい、霊夢が如何に掃除をサボっているのがすぐに分かる有り様だ

「さて、何かお宝はあるかなぁ～？」

蔵の中には壺やら巻物やら古文書など、いかにも年期の入った物が沢山置いてあった

最初は酒を探していたがこの様子では恐らく酒など無いだろう、以前にやった宴会の時に全て飲んでしまったんだと思う

しかし、それ以前に私は周りの巻物や古文書に目をひかれた

中には堂々と「博麗奥義集」などと書かれた本もあった

「お、面白そうな本見っけ」

早速私はその博麗の奥義が書かれているであろう本を手に取った

「ん～？・・・ 成る程」

成る程とは言っているが内容は半分も理解出来ていない

相当古いのか文字は達筆すぎて読めない

魔道書の解読は日頃やっているが流石にこれはやりたくない　恐らく解読しても私に扱える技など載っていない無いだろう

「・・・ ほ、他のも見てみるのぜ」

気を取り直して私は他の書物を見てみる

しかし、他の本もどれもこれも達筆で全く読めない、しかもほとんど初代博麗の巫女辺りが書いたものらしく言い回しも古典的で読んでいても面白くない

「どれもこれも同じのばっかだなぁ」

不満を口にする

私は最初の期待を裏切られ苛々していた
酒も無く興味のある書物があっても全て達筆で読めない
「少し奥の本も見てみるか・・・」
そう言って私は手前に置いてある無駄に高価そうな壺をどかして奥の書物を手に取る
「お!これは・・・」
その本は結構新しく字も多少達筆だが読める
「やっとまともな本が出てきたぜ・・・ よし、早速読むか」

～少女読書中～

「・・・ こ、これは」プルプル
その本は先々代が書いたものらしく内容はとんでもないものだった
「ま、まさかこれって・・・」プルプル
私の肩が小刻みに震える
「これって・・・」プルプル
「ポエム集じゃねーか!!」
その本には先々代が生前に書いたと思われるポエムが坦々と続いていた

「確か先々代の巫女って歴代の博麗の巫女の中でも最凶って言われてたんだよな・・ その巫女がポエムって・・・ プププ」
「あはははは！」
「な、なんだこれｗｗｗ　蝶々が綺麗　とか　花が可愛い　とかｗｗｗ」プルプル
「・・・」プルプル
　チラッ
「あはははは！」
　予想外すぎた、まさか先々代の巫女がポエム集を書いていたなんて
「あはははは！・・・ はぁ」
　一通り笑った私はその本をもとある場所にそっと戻した
「・・・」

「なんか・・・ ごめん」
　冷静になると少し申し訳ない気持ちが出てきた

「・・・ 次で最後にするか」
　何だかこれ以上蔵の中を漁っても何も進展は無さそうなので次に見つけた本を最後にしようと私は棚の奥に手を伸ばした
「うーん、もうちょい奥かな？」
　手前の本を退けながら取り敢えず奥の本を目指して手を伸ばすすると

　カタッ

「ん？何だこの感触？箱か？」
　棚の一番奥に手を伸ばすとそれは本ではなく箱の様なものに手が触れた
「取り敢えず引っ張り出すか」
　今度は両手を使い、慎重にその箱？を引き出す
「・・・ 箱・・・ だな」

それは長細い木箱だった
妙に新しくご丁寧に蓋には「開けるべからず」と書いてあった
「開けるなって書いてあったら開けたくなっちゃうよなぁ・・・ えい！」
私は迷うこと無くその木箱の蓋を開けた
今思えばそこで大人しく箱を棚に戻しておけば良かったのだが、その時の私は一切迷うこと無く蓋を開けた
「ん？・・・ これは・・・」
てっきり河童の腕や鬼の腕などの呪物かと思ったのだが箱に入っていたのは・・・
「・・・ 巻物？」
その巻物は蔵に置いてある他の巻物とは違い手入れをされているようで綺麗だった
誰かが管理をしているのだろうか？
「巻物か・・・ まぁいいや、これを読んで蔵の探索は終わりにするぜ」
巻物の表には「博麗血筋をここに記る」と書かれていた。要するに家系図だ
「家系図か・・・ そう言えば霊夢の親の事全く知らないな」
考えてみれば私は霊夢の母親も父親も全くしらない
母親は先代の巫女だと思うが父親の事は全く知らない
霊夢本人の口からは勿論 紫からも父親の事は一切聞いたことがなかった
「気になるな・・・」
霊夢には悪いとは思ったが、私は興味の方が大きく早速その巻物を破かない様にゆっくり開けた
「・・・」
最初の方には初代博麗の巫女の事が記されており、博麗家の大元の人物のようだ
「・・・・・ ん？」

しかし気になる事があった、
初代博麗の巫女の子供として次の巫女の名前が記されている　が、その父親が書かれるはずの所が何故か空欄になっているのだ
まるで父親は存在していないことになっているかのようだ
「なんで父親の名前が書かれてないんだ？」
気になるも私は巻物をゆっくり開いていく

「・・・」

巻物には次々と今までの博麗の巫女の名前が書かれている
が、全ての巫女に父親の名は書かれていなかった
私は少し恐怖を覚えた　当然だ本来家系図には父親、母親、子供と書かれるはずなのだ
しかし、その巻物には「女性の名前しか書かれていない」そんなのはあり得るのか？

（まさか本当に父親はいないのか？）
とも思ったがそんな事はありえない　と先程の考えは絶対にないと思った
しかし巻物には父親の存在など全く書いておらずまるで母親だけで子供を生んだ様に書き記されていた
しかも今までの博麗の巫女全員がそうであるかのように

「どういうことだ？」
巻物を開けば開くほど謎は深まる
そしてとうとう私の知っている名前が書かれている所に来た

「霊夢・・・」
当然の事ながら霊夢も博麗の巫女である以上ここに名前が書かれている

「霊夢の名前があると言うことはこれで書かれているのは最後か・・・」
そう言い私は巻物を一旦元に戻そうと一度巻物の芯の部分を引っ張る、すると少し緩んでいた巻物が開く

するとそこには今までの博麗の巫女とは違う事が書かれているのに気がついた
霊夢の名前の上に小さく「姉」と書かれており、霊夢の隣にはその妹と思わしき名前が書かれていた。霊夢に姉妹がいたことにも驚いたがすぐにその驚きは打ち消され、私は驚愕の事実に我が目を疑った。
それは驚く以前に頭が真っ白になる程の内容だった

「・・・ なんで霊夢の妹の名前が魔理沙なんだ」

三話　博麗の過去

「……」
手が震えている
動機が激しい
目の前の事実に私の頭は真っ白になっていた…
「霊夢の妹が…　私？…」
博麗の家系図に書かれている霊夢の名前の横には確かに　妹・魔理沙　とかかれていた
だが当然そんなのは知らない。私は一人っ子だ、少なくともそう育てられてきた　親父には母親は私が幼い頃に病気で死んだと聞かされていた。
「一体これは…」
全く思考が追い付かない
果たしてこれは事実なのか　それとも誰かの悪戯なのか
とりあえず家系図を元に戻そう…　そう思い　私は急いで巻物を木箱に戻す…
「と、とりあえず香霖にでも話を…」
「見てしまったのね」
不意に後ろから声がかかる
それは聞き覚えのある声だった
「紫…」
声の主は八雲紫　幻想郷の創設者の一人だ
「…　よりにもよって貴女に　それ　を見られてしまうなんて」
この時の紫の悲しそうな顔は今後忘れることは無いだろう
「ゆ、紫　この…　家系図に書かれていることは本当なのか？」
声が震えている　この時の私は紫に「違う」と言って欲しかったのだろう　安心が欲しかったのだろう
しかし、紫の言った言葉は私を余計混乱させた
「……　その家系図に書かれていのは嘘偽りの無い真実　魔理沙、貴

女は霊夢の実の妹よ」
何も言葉が出てこない
霊夢が姉・・・ 私が妹・・・
「・・・・・ どういう事だ」
無意識に紫を睨んでいた
真実にしても何故今まで黙っていたのか　これが事実なら私は幼い頃に捨てられ人里の道具屋の一人娘として養子になったと言うことだろう
「勘違いしないで　別に貴方は捨てられた訳じゃないわ」
紫は人の心を見透かしたように冷静に言った
「じゃあ説明してくれよ・・・ 何で私と霊夢が姉妹なんだ」
「・・・・ 分かったわ　けどその前に博麗の歴史を話す必要があるわ」
紫はそのまま博麗の過去について話を始めた

「幻想郷が出来たのは今から５００年以上前　出来たばかりの頃は弾幕ごっこは愚か博麗神社すら無かった。私は妖怪と人間がバランス良く生活できる生活を夢見て幻想郷を作った。」
「・・・・・」
「でも現実はそうはいかなかった、知恵のない妖怪達は無差別に人間達を襲い殺した。そしてどんどん人間達は減って行った・・・ このままでは妖怪だけになってしまう　そう思った私は外の世界から一人の巫女を連れてきた。それが初代博麗の巫女」
・・・ 坦々と話を聞いているが全て初めて知った
幻想郷の事はある程度知っていたつもりだったが初代の博麗の巫女が外の世界の住民だなんて霊夢の口からも聞いたことがない
「・・・ さて、ここからが博麗と貴方の関係についての話になるわ」
紫は私の目を見つめ少し悲しそうにそう言った